
三メートルの戦場

遊多

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三メートルの戦場

【Nコード】

N0085E

【作者名】

遊多

【あらすじ】

新任の早川先生に誘われて俺はある部活に入部した。縦274センチ横152.5センチという小さな台でボール打ち合う最速のスポーツ——卓球。スマッシュの打ち合いともなれば飛び交うボールは時速100キロを軽く超える。……美人に弱いのは男の性さ。

第一話

熱気溢れる体育館。

この大会に出場している選手は少なく見積もっても五百人。それだけの人数が詰め込まれているのだから当然室温も上がる。夏の陽気もあつてか体育館の中は軽く四十度を越えていた。

そんな中、俺は激闘を繰り広げていた。縦274センチ横152.5センチという小さな台でボール打ち合うスポーツ——卓球。スマッシュの打ち合いともなれば飛び交うボールは時速百キロを軽く超える。嘘じゃない、本当だ。現に今、俺がそれをやっている。

「ドンマイドンマイ」。しょうがないよ」

ラリーに打ち負けて失点した俺を先輩が後ろから励ます。

疲れた。手首も痛いし、もう負けが決まったようなものだ。まあ、疲れているのは相手も同じだけどな。俺は台を挟んで向かい側に立っている相手の選手を見た。

「よし。後、一本だ」

相手の選手は小さくガッツポーズをして呟いていた。ちなみセツト数は1対2。このセットのカウントは9対10で俺が負けている。5セットマッチ3セット先取なので次に相手が点数を取ったら俺の負けだ。逆に俺が点数を取ればデュースになって勝負は分からなくなってくる。

「さー、集中」

俺は声を出し、自分を鼓舞する。手っ取り早く負の感情を払える良い方法だ。

俺が台についたのを確認し、相手も構える。

サーブは俺からだ。とっておきのヤツを見せてやる。

ボールを高くトスする。落ちてくるボールの斜め下を押し出すようにしてサーブを放つ。無回転のサーブ——ナックルサーブだ。

ボールは高速で飛び、相手のバック側コーナー付近にバウンドし

た。よし、狙い通りだ。

相手はまさかこの状況でロングサーブが来ると思っていなかったらしく、反応が遅れていた。それでも落下地点付近にしっかりと移動してスマッシュのモーションに入っている。

あ、バレたかも。

俺の予想通り、相手のラケットの角度は台に対してほぼ垂直になっている。ナックルサーブという事はバレていたようだ。バッチリのタイミングでスイングし、そのままボールの横っ面を叩く。

そのようにして放たれたスマッシュは俺のコートのバック側コーナに突き刺さった。が、俺も打たれることは予想していた。あらかじめコーナの近く――ボールがバウンドし上昇する所にラケットを置くようにしておき、それを跳ね返す。サーブで狙った場所とは逆のコーナに。

相手はそのボールに飛びつき、何とかラケットを当てる。だけど、ラケットの角度がおかしい。

ボールは高く上がり俺のコートにバウンドし、再び高く上がった。俺は野球のオーバースローのような動きでボールを力一杯相手コートに叩きつける。高く跳ね上がったボールは相手の頭上を大きく超えて観客席に落ちた。

よし、一点取った。これでデュースだ。

俺はガッツポーズを取り、喜びの声を上げた。これで試合は分からなくなってきた。疲れてるし、左手首も痛い。だけど、ここまで頑張ったんだから勝ちたい。俺の中で何かが熱く燃えていた。

気が付くと相手は観客席からボールを取って、戻って来るとこだった。スゲー悔しそうな顔をしてる。相手は格上だけど勝てるかもしれない。そんな思いを胸に秘め、俺は構えた。

相手も台につき、構える。次は相手のサーブだ。

フォア前にショートサーブが来る。俺はそれを払うようにして相手のフォア側に返す。するとそれをスマッシュで返され、俺も負けじとスマッシュで返す。

デュースになってからはお互いにスマッシュの打ち合いとなっていた。取ったり取られたり、お互いの点数は交互に積み重ねられていき、気がつくとカウントは19対18と凄まじい数になっていた。ここまでデュースが続く事はあまりない。というか、俺にとっては初めてだ。

さっきまで気づいていなかったが、俺が一点リードしている。デュースは先に二点差をつけたほうの勝ち。つまり一点だ。後、一点でこのセットは俺の勝ちとなる。

「さあ、一本」

俺は小さく、自分にだけ聞こえるような声で自ら鼓舞した。別に大きな声で言うのが恥ずかしい訳じゃない。正直、体力が限界なんだ。このセットを取っても次がある。それを取れるかどうか……。

俺はそこまで考えると慌てて首を振った。そんな弱気でどうする勝つのは俺だ。

ゆっくりと台につき、構える。

相手もそれを確認するとボールを高くトスする。落ちてきたボールの斜め上を擦りあげるようにしてサーブは放たれた。

俺は一瞬でそのサーブがなんだか理解した。上回転サーブ——ドライブサーブだ。

打って来いということか。相手のお望みどおり、俺は全力でスマッシュを放つ。全身の力を掻き集めて打ったスマッシュだ。返せない筈。俺は相手コートに突き刺さる自分のスマッシュを思い浮かべた。

しかし、俺の思いとは裏腹にボールはネットの上部に当たった。ボールはネットに力を吸収され、ふらふらとネットの上部を綱渡りするかのよう揺れる。

向こうに落ちろ。

俺は強く念じた。その祈りが通じたのか、ボールは相手コートに落ち、小さく二回バウンドした。

俺は喜びを抑え、相手に向かって軽く人差し指を立てて見せた。

卓球ではネットなどになって得点してしまった時、こういう風に謝る。流石はイギリス生まれのスポーツ。紳士的だ。

セット間の休憩のために自陣に戻る俺。

何故か、そこで意識が途切れた。

「ひかる光〜？」

誰かが俺の名前を呼びながら俺を揺すっている。どうやら安眠タイムはここまでらしいな。窓側の一番後ろの席は寝るのは最高なんだけど。しょうがないか。俺は潔く体を起こした。

ここがどこかというと、学校だ。日比野学園高等学校。別に頭が良いわけでもなければ悪いわけでもない。部活が強いわけでもなければ弱いわけでもない。例外として女子卓球部は強いらしいが俺には関係ない。要するに普通の私立高校だってことだ。傍から見たら普通じゃないらしいけど

「昨日、夜遅くまで寝てたから眠いんだけど」

間違えた。夜遅くまで起きてたから眠いんだけど、だ。まあ、目の前にいる俺の親友には言いたいことが伝わったらしいから良いけど。

あゝ、相変わらずモテそうな面なこと。成績も良いし、性格も良いもんな〜。

そんなことを思いながら目の前にいる爽やかイケメンの親友――
せがわこういち瀬川浩一を眠そうな目で見た。

「何？」

手短に用件を訊く。だって眠いんだもん。

「もうそろそろ先生来るからさ。あ、知ってた？ 新しい先生が来るんだって」

「へえ〜。男？ 女？」

「女だって」

「じゃあ起きてよう」

俺は大きく伸びをして眠っていた全身の細胞を呼び起こす。やっぱり性欲には勝てないよね。

「ははは、やっぱ一条は女好きだな」。身長低くて女っぽい顔のクセに」

不意にクラスメイト——山本が俺に話しかける。当然、一条っていうのは俺のことね。一条光、中々良い名前だよな。お気に入りだ。まあ、身長低くて女顔っていうのも自覚してる。時々、女子から“ヒカリちゃん”なんて呼ばれるがしょうがない。そのおかげで女子から警戒されにくいのはラッキーだけだな。

「うるさいよ、山本。で、この季節に新しい先生が？　もう夏休みまで一ヶ月ちよつとだぞ」

俺は浩一に疑問をぶつけ、窓の外を見る。まだ六月だというのにセミの鳴き声が聞こえる。梅雨が過ぎたといえ出てくるの早すぎる。

「あゝ、何かうちの担任がやめるらしいよ。家の都合がどうかで」「へゝ、工藤先生やめるんだ。男子卓球部ってどうすんの？」

このクラスの担任であり、男子卓球部の顧問でもある工藤先生。何度か卓球部に誘われたこともある。ちよつとした理由があつて入らなかったけど。ちなみに工藤先生は教師の仕事にかなり熱心だ。この時期に退職なんて一体何があつたんだろうか。しかし、そんなことはどうでも良い。俺には卓球部の存続問題と新任の女教師の方が気になる。

「何か、新しく来る先生が顧問やつてくれるんだってさ。なあ、山本」

「ああ。昨日の部活の終わりに俺達に言ってたもんな。つか、新しく来る先生って卓球出来んのか？」

「さあ？」

浩一は首を傾げて笑った。周りの女子の目が浩一に釘付けになる。独り占めは良くないよ、浩一君。ていうか、山本って卓球部だった

んだ。浩一が卓球部なのは知ってたけど。

「おい、お前ら。席に着け」

会話に夢中になっていた俺達に声が掛かった。その声の主は教卓に上でこちらを見ていた。さっき話題に出た工藤先生だ。となりに小さな女の人が立っている。まさか、あの人が――。

「あゝ、お前ら。噂で知っていると思うが俺は一身上の都合で教師をやめることになった。もちろん、代わりの先生はいるぞ」

工藤先生はそこまで言うとは歩身を引いた。代わりに女の人が前に出る。

「今日からこちらの学校で教師をさせていただきます。はやかわみつき早川美月です。担当は教科は英語。卓球部の顧問をすることになりました。よろしくお願いします」

よっしゃゝ！ 超美人だゝ。背は小さいけどスタイル良いし、セミロングの髪は綺麗だし、顔も良いし。

工藤先生やめてくれてありがとう。

「おい、光。予想外なぐらいに美人だぞ。後は卓球が上手いかな、山本」

俺の前の席に座っている浩一が話しかけてきた。ちなみに山本は俺の隣の席だ。

「俺はもう満足だ」

山本はうつとりとした目で早川先生を見ている。まあ、気持ちには分かるけどな。

「まあ、帰宅部の俺には関係ないし」

俺は手をひらひらさせて答えた。卓球部に入っていない俺には卓球の強さなんて関係ないよ。それに美人だからそれで満足ゝ。

「あ、じゃあみんなの名前を覚えるために出席取るね。返事してよ」

早川先生の澄んだ綺麗な声で俺達は我に返った。

あゝ、声も可愛いなゝ。

「工藤先生は？」

隣で山本が呟いた。

あつはつは、山本。馬鹿かお前は。工藤先生ならそこに……いねえし。別れの挨拶ぐらいしようよ、先生。ま、気にしないけどな。あゝ、もう早川先生最高。

「一条君？」

早川先生が俺を呼ぶ。そういえば出席取るって言ってたな。出席番号一番って俺だし。

俺はういゝ、と微妙な返事をした。だって眠いんだもん。

早川先生は教室中を見回している。俺を探してるのかな？

「一条光君？ 手上げてゝ」

やっぱり俺を探していたらしい。

「はい」

俺は手短に返事をして手を上げた。早川先生と目が合う。

「一条君どこの中学校だった？」

早川先生は少し俺を見つめた後、そんな事を訊いた。

「沢波中ですけど……」

俺はやや歯切れの悪い答え方をしてしまった。質問の意図が分からなかったからだ。みんなに出身中学校を訊くのは効率が悪い。みんなのことを知りたいなら自己紹介させれば良いんだから。

「ふゝん。沢波中だったんだ？」

先生はみんなに聞こえるかどうか微妙な声で呟いた。

え！？ 何、その反応。もしかして俺、ブラックリスト入った？

え、何で。俺、何もやってないよ？

俺は頭を抱える。いくら考えても理由は見つからず、思考のラビリンスに嵌っていく。いや、メビウスの方が良いかな？ どうでも良いけど。

「光、体育館行くぞ」

浩一が話しかけてくれたおかげで俺は我に返った。

「何で、出席は？」

「は？ とつくに終わったよ。１時間目は体育だから早く行って着

替えるぞ」

「お、おう」

俺は体育着を入れた袋を持って浩一の後を追った。

「うゝ」

腕を組み、食券機の前で唸る俺。

あ、ちなみにここは食堂ね？ 今日は何故か午前だけで授業は終わり。ちなみに食堂は午後八時までやっている。部活で頑張っている生徒のためらしい。

普段は弁当を持ってきてるんだけど今日は作るの忘れた。だから食堂に来ている。

「うゝ」

何しようか、全く決まらない。まあ、悩んだ時はカレーだと俺は決めている。

俺はカレーのボタンを押した。すぐさま、券が出てくる。出てきた食券を握り締め、この食堂を営んでいるおばちゃんの元に向かう。おばちゃんからカレーを受け取り、座る席を探す。まあ、生徒の数より席の方が多いから探す必要は無いけど。とりあえずいつもの窓際の席に座る。お気に入りだ。太陽光は気持ち良いよね。たくさん浴びとかないと。光だけに。

一人でつまらない洒落を考えながらカレーを口に運ぶ。浩一も山本もさつさと飯を済ませて部活に行った。正直、寂しいな。あんまり男の友達多くないし、俺。女の友達はたくさんいるんだけど。誰も恋愛対象として俺を見てないけど。悲しいぜ。

気づいたら既にカレーは残り一口になっていた。それを口に運び、席を立つ。

「一条君？」

不意に後ろから声をかけられた。とりあえずその人物の方を向く。

「あゝ、やっぱり一条君だ。ねえ、今時間ある？」

早川先生が無邪気そうな笑みを見せながら俺の前に立っていた。近くで見ると先生って小さいんだな。百五十五ぐらいかな。まあ、俺も小さいんだけどね。百六十二しかないし。

「何か、用ですか？」

小さいとはいえ教師なので敬語を使っておく。

「あ、うん。ちょっと話があるんだ。そこ座ってくれろ？」

先生はさっきまで俺が座ってた椅子を指差した。俺は言われるがままに腰を下ろす。

「で、何ですか？」

俺はもう一度訊く。別に用事があるわけじゃないけど。あまりここにはいたくない。熱いし、人がたくさんいるし。

「ごめんね。すぐ終わるから。……一条君って部活入ってないよね？」

俺の隣の席に腰を下ろした先生が訊く。俺は手短かにええ、と答えた。

「ならば、卓球部に入らない？ 私、卓球部の顧問なの」

なんと卓球部への勧誘を受けた。前の顧問の工藤先生にも何回か誘われたけどまさか会って一日目の人に勧誘されるとは思わなかった。

「何で、俺なんですか？」

「え、だって一条光君でしょ？」

とんちんかんな答えを言う先生。一条光という名前と卓球は関係無いような気がする。ていうか、関係ない。

「まあ、一条光ですね」

「でしょ。だったら卓球やろうよ」

卓球か。工藤先生の時から断り続けてるんだけど……。俺の答えは決まっていた。

「そうですね」

……美人に弱いのは男の性さ。

第二話

「ここが第一体育館？」

「あ、はい。そうですよ」

第一体育館の前で会話をする俺と早川先生。食堂での会話の後、早川先生は善は急げとばかりに俺をこの第一体育館に連れてきた。まあ、早川先生は道が分からなかったから連れて来たのは俺なんだけど。

当然だけど、この第一体育館はこの学校で最初に造られた体育館だ。体育館の規模はバスケットボールのコート二つ分。だけど、大規模な部活が使う第二体育館、歴史ある女子卓球部が使う第三体育館には設備的にかなり見劣りする。まあ、男子卓球部は第一体育館でも充分だけどね。

「じゃあ、入ろうか？」

早川先生はそう言うのと、体育館の扉を開けた。埃っぽく、生ぬるい空気が体育館から流れ出る。暑いから入りたくないけど入らないわけにはいかない。

俺は体育館の中へと足を運んだ。一步前を早川先生が歩いている。まだ部活は始まってないらしく、卓球台は一台も出て無かった。

「あれ？ まだやってないんだ。部室に行ってみようか？」

早川先生は小首を傾げながら言った。特に意見も無いので頷いておく。ちなみに部室の場所は二階だ。ギャラリーの裏辺りに幾つかの部屋があつてそこを部室に使っている。

俺達は体育館の端にあるギャラリーへの階段を上がっていく。上がり切ると二つの通路が目に入った。片方はギャラリーへ、もう片方は部室へ繋がっている。そういえば、ここに用があつて来るのは初めてだ。前に来たのは上級生に学校を案内されてる時だったからな。

「一条君？」

ふと、早川先生が俺を呼んだ。いつの間にか、先生は通路の先にいた。慌てて駆け寄る。近づいてみて初めて分かったけど、この通路の途中に幾つも扉があり、早川先生はその一番奥に立っていた。扉の上には男子卓球部と書かれたプレートがぶら下がっている。ここか。

扉を小さく二回ノックする。中からバタバタと足音がした。

「はい？ あれ、どうしたの？」

扉を開けて姿を現した浩一が不思議そうな顔で俺を見る。まあ、当然か。今まで入部を断り続けてたのにいきなり部室に来るんだから。

「新入部員だよ」

言葉に詰まり、答えられなかった俺の代わりに早川先生が言う。ちよつと理由が思いつかなかつたんだよね。流石に先生が美人だからとは言えないしな。本人いるし。

「マジッスか？ そうなの、光？」

「まあ、な」

何となく歯切れが悪くなってしまうのは後ろめたさを感じているからだろうか。今まで断り続けていたのにいきなり入部することにしようがないと言えましょうがないんだけど。

「どうした、瀬川」

浩一を押し分け、一人の男が出てくる。……凄い普通だな……。

意識しないとその他大勢に紛れ込んでしまうような、そんな感じがする。まあ、中身は普通かどうか知らないけど。

「あ、新入部員です。部長」

……部長？ こんな普通の奴が部長なのか。インパクトに欠けるなあ。異常な奴よりは良いけど。

「新入部員？ このチビがか？」

……いきなりそれか。うん、悪気は無いんだろうけど。気分悪いよ。

「あ、どうも。一年の一条光です」

軽く頭を下げておく。機嫌が悪くてもそれを態度に出すほど子供じゃないからな。

「ふ〜ん。卓球出来るの？」

「さあ？ それなりに出来ると思いますけど」

「前に卓球やってたのか？」

「まあ、一応。中学のときは卓球部に半年ぐらい所属してました」
「ふ〜ん」

「あ、すいません。名前を覚えて貰えますか？」

「そういえば言っ てなかったな。三年の鷹野^{たかのさとし}聡だ。よろしく」

「はい、よろしく願います」

また、軽く頭を下げる。鷹野先輩か。悪い人じゃないみたいだな。まあ、上手くやっていけるだろう。……でも、俺をチビ呼ばわりしたことは覚えておくからな……。

「あ、鷹野君？ 私、新しく顧問を務めることになった早川美月です。よろしくね」

俺達の会話に区切りがついたのを見計らって、早川先生が鷹野先輩に話しかけた。

「こちらこそ、これからよろしく願います」

鷹野先輩はそう答えながら片手を差し出した。早川先生も手を出し、軽く握手する。良いな。俺も握手したいな。

「とりあえず、部室に入れてもらっても良い？」

「あ、すいません。気づかなくて」

鷹野先輩と浩一は身を退かし、俺と早川先生が部室に入れるようにする。最初に早川先生、次に俺、更に浩一と鷹野先輩。順番に部室に入っていく。

部室は意外に広かった。教室一つ分と同じ大きさだ。端の方にテーブルがあり、そこにネットなどの卓球用品が置かれている。その反対側にはテレビとDVDプレーヤー。隣には本棚があり、たくさんDVDを入れたケースと雑誌が並べられている。豪華だな。

部室に入る前は気づかなかったけど他にも部員がいたらしい。五、

六人の生徒が部室の真ん中にあるパイプ椅子に座って話をしている。ていうか、少ないな。

「意外と広いでしょ？」

いつの間にか隣に立っていた浩一がニツコリと笑う。ナイススマイルだ。俺が女ならときめいちゃうね。

「部員ってこれで全員？」

浩一の言葉には答えずに自分の質問を優先させる。だって、こっちのが重要だし。

「そ、これで全員。少ないなりに頑張ってるよ」

浩一は大して気にした風は無く答えた。こいつの場合は勝ち負けよりも楽しめるかどうかの方が重要なんだろうな。

「おーい、全員集合」

鷹野先輩の声が部室に響いた。パイプ椅子に座っている奴らが話をやめ、鷹野先輩の周りに集まる。これで正確な部員の数が分かった。この卓球部の部員は俺を入れて全部で9人。少ないけど、しっかりと練習が出来る程度にはいるな。

「はい、これ。新入部員の一条君」

鷹野先輩が引っ張られてみんなの前に出される。ていうか、これって言わないで欲しいな。意外と繊細なんだから。

「あ、ども。一年の一条光です」

さっきと同じように軽く頭を下げた。

一瞬の間を置いてパチパチと拍手が起き、みんなが名前を名乗っていく。

「俺、一年の山本^{かずひろ}一洋。よろしく」

中学時代は野球部だった山本。その時の名残なのか頭は常に坊主だった。野球Ⅱ坊主じゃあないけど。

ていうか、山本よ。初対面みたいな挨拶はやめようよ。今朝も話したじゃん。

その後にも色々な人に自己紹介をしてもらったけど……覚え切れねえよ。みんな自重しろよ。

「で、この人が新しい顧問の早川先生」

「みんなよろしくね」

「よろしく願います!!」

みんなテンション高いな。そんなに嬉しいか。まあ、前の顧問は無精髭の中年オヤジだったからな。やっぱり、美人の方が良いよね。」「じゃあ、練習するぞ」

鷹野先輩はネットやボールが入った箱を持って部室を出た。他の部員もそれに続く。

「俺……制服のままで……」

食堂で早川先生に誘われなければそのまま帰ってた筈だからな。当然か。まあ、体育着とか入れた通学用の白いエナメルバッグも持ってきてるし。結果オーライ？

「じゃあ、着替えたら下りてきてね」

早川先生はのんびりとした歩調で部室を出ていった。

ブレザーを脱ぎ捨て、ネクタイをパイプ椅子に放る。次に白いシヤツと黒いハーフパンツをバッグから取りだす。さっさと着替えよう。

着替え終わり、一階に下りた俺を早川先生が待っていた。新入部員である俺の相手をしてくれるらしい。ラッキーだ。

卓球台は全部で五台出されている。全部の台が並列に並べられていて一番奥の一台だけが空いている。誰かが用意しておいてくれたのだろう。とりあえず先生と共に台につく。

「はい、ラケット。ペンだね？」

「あ、どうも」

先生が差し出したラケットを受け取る。鉛筆などを握るように持つペンホルダーラケット。基本的にラバーは片面にしか貼らない。基本的にな。それにしても、よく俺がペンだって分かったな。今時、

十人に二人ぐらいしかペンはいないのに。ちなみに残りの八人はシェークハンドラケット。今、先生が持っているラケットで握手するように持つラケットだ。ペンと違って両面にラバーを貼るため、そういう面では有利だ。

「あれ、右利き？」

ラケットを右手に握った俺に先生が訊く。

「は？ まあ、右利きですけど」

先生も面白い人だな。だいたいの方は右利きなんだからそんな不思議なことじゃないだろ。

「じゃあ、軽く打とうか」

先生は軽くサーブを打つ。意図的に回転を掛けず、スピードも打ち返しやすいようにしてある。

だけど、俺はそれを返せなかった。ラケットは空を切り、ボールは後ろに逸れる。

「ごめん、速かった？」

先生が驚いたような目で俺を見る。うわ、恥ずかしいな。先生の視線を受けながら後ろに逸れたボールを拾う。

流石にサーブはミスないだろ。軽くボールをトスする。そして落ちてきたボールをじっくりと狙い……空振り。泣けてくるな。

「あゝ、一条君？ ちょっとフォアの素振りやってみて？」

先生に言われた通り、素振りをする。

右足を軽く前に出し、姿勢を落とし、ラケットを振る。しっかりと腰を、肩を、回して手打ちにならないようにする。これが基本のフォアハンド。

うん、素振りは完璧。

「よし、大丈夫。もう一回打ってみようか。素振りの通り打ってみて」

言われたとおり、台につく。適当にボールをトスして適当に打つ。少しバウンドが高いけど気にしない。今は入ればオッケー。

先生は、今俺がやったような綺麗なフォアハンドでボールを返し

てくる。俺のことを気にしているのか、球足は遅い。

先生に言われたとおり、素振り通りのフォームでラケットを振る。よし、入った。けど、コースがおかしい。ボールは先生のバック側に向かって飛んでいく。また、ミスった。

先生は素早くバックハンドに構えを切り替え、軽く打ち返してくる。さっきと同じコースに。コントロールが良いな。

今度は失敗しないように狙いをつけ、スイング。今度は良い感じの場所に飛んだ。先生も俺の打ちやすいコースに返してくれる。そのおかげでミスすることなくラリーが続いていく。気がつくとなりのスピードも最初の時より上がっている。まあ、隣で打ってる浩一と鷹野先輩には敵わないけど。

「あつ！」

一瞬気を逸らしたのが駄目だったのか。俺はボールを捉え損ないネットにボールが引つ掛かる。まあ、それなりに続いたから気にしないし。

「じゃあ、次はバックね。出来るよね？」

ネット際を転々としているボールを拾い、先生が俺を見る。俺は一瞬の間を空けて頷いた。

台につき、構える。今度はバックなので足は並行気味に、ラケットは体の正面に置くように構える。ペンのバックの基本。ショットの構えだ。

先生がサーブを打つ。やっぱりこれも打ち返しやすいサーブだ。ボールがバウンドして上がり切る前に、ラケットを前に押し出して打ち返す。ショットは相手のボールの威力を利用して打ち返す。だからボールがバウンドして上がり切る前に打った方が良い球が出る。

これも先生のおかげでラリーが続いていく。ショットはモーションが小さくて軌道をコントロールしやすいからフォアよりもラリーがやりやすい。

俺がミスをしない範囲で先生が球足を速め、それに比例して俺の

返球も速くなっていく。

「休憩」

鷹野先輩の声が響き、先生がボールを手で取る。練習を始めてから一時間半も経ってる。全然気づかなかったな。

「先生。ちょっと試合しませんか？」

鷹野先輩が先生に声をかける。先輩と先生の実力。同時に見極められる良い機会だ。とりあえず、邪魔にならないように台から少し離れた所に座しておく。

「良いよ。じゃあ、こっちのラケット使っても良い？」

先生はそう返しながら、足元に置いてあるラケットケースから違うラケットを取り出して鷹野先輩に見せる。

チラリと見たけど、フォアが裏ソフトでバックが粒高だったな。ラバーは大きく分けて三種類に分けられる。

表面が平らで回転を掛けやすい裏ソフトラバー。バランスが良いラバーが多いため、現在、最も多くの人に使われている。

表面が粒々で初速に優れる表ソフトラバー。ボールとの接触面積が小さく、回転の影響を受けづらい。その反面、自分から回転を掛けづらい。速攻を好む選手が多く使っている。

表ソフトの粒をより細く長くした粒高ラバー。回転方向を保ったまま返球することが出来る為、変則的なプレーが出来る。その代わり、安定性が悪くて自分から攻撃していくのは少し難しい。

他にもラバーの種類はあるけどそれを使っている奴は少ない。

「じゃあ、俺はこれで」

鷹野先輩も自分のラケットを見せる。シェークで両面とも裏ソフト。良くある組み合わせだ。

「じゃあ始めよっか？」

「はい」

二人は台につき、構える。サーブは先生からだ。

「お、試合するんだ」

浩一が俺の隣に腰を下ろす。

「鷹野先輩って強いのか？」

「市大会ベスト16だつてさ。中学の時の成績だけど」

「ふ〜ん」

市大会でベスト16か。弱くは無いな。特別強いわけじゃないけど。

「うん、ナイスコース」

先生の無邪気な声が体育館に響く。あゝ、見てなかった。

「今の見た？」

「見てない」

「そう。じゃあ次はちゃんと見ておいた方が良いよ」

浩一が忠告する。

俺は言われたとおり、二人の試合を見る。多分、ポイントは1-0。今、先生が一点取ったばかりだろうから。卓球のサーブは二本交代だから次も先生のサーブだ。

先生はバックで構え、ボールを高くトスする。落ちてきた所に合わせてラケットが振り切られる。どの方向に回転しているのか、全く分からない。横に切ったような気もするし、下に切ったような気もする。回転の全く分からないサーブは鷹野先輩のバック側に飛んでいく。

鷹野先輩はラケットの打球面を少し上に向け、ボールをつつくようにして打った。下回転系のボールを返すのに良く使われる技術——ツツキ。名前は気にしちゃいけない。

下回転に横回転の混ざった斜め回転だったらしい。ボールは鷹野先輩の打とうとしたコースから逸れて、先生のフォア側に飛んだ。

先生はそのボールを擦り上げるようにして打つ。ドライブだ。現代の卓球では必須の攻撃技術だ。

上回転の掛かったボールが鷹野先輩のフォアに飛ぶ。

鷹野先輩はそのボールの回転を押さえ込むようにラケットの面を軽く下に向けて打ち返す、はずだった。予想以上に回転の掛かっていたらしくボールは大きく上に逸れてアウトになる。

「うん、ナイスボール」

先生は無邪気に笑う。対して鷹野先輩は苦々しげな顔をしている。まあ、当然か。何も出来ずに点数を取られているんだから。

「さあ、一本！」

静まり返った体育館に鷹野先輩の声が響く。いつの間にか、みんながこの試合を見ている。やっぱり気になるよな。

次は鷹野先輩のサーブ。

少し低めのトス。ネット際——フォア前に短い下回転サーブ。中々、上手いな。

先生はラケットを前に出し、ボールをつつつく。身長が足りないせいでラケットが深く入らない。ボールは高くなり、フォアコーナ―に落ちる。

鷹野先輩は全身のバネを利かせ、強烈なドライブボールを放つ。

ボールは先生のフォアコーナ―に突き刺さり、上回転により加速する。

先生は反応できず、ボールを見送った。

これで鷹野先輩に一点。だけど先輩はこれ以上点を取れなかった。終わってみれば11対1。先生の圧勝だった。

「さて、俺も試合してもらおうかな」

浩一はゆっくりと立ち上がった。あんな試合を見ておいて試合を挑むのか。相変わらず良い根性してるな。

「先生」。俺とも試合してくれますか」

試合が終わり、大きく伸びをしている先生に浩一が声をかけた。

「もちろん」

「ありがとうございます」

先生と浩一は素早く台につき、お互いにラケットを見せ合う。

浩一のラケットは普通のラケットより打球面が少し大きい。フォア面には良く回転が掛かり、弾みを押さえた守備選手向けの裏ソフト、バック面は安定性を重視した粒高。典型的なカットマンだ。カットマンっていうのは……。

おっと、浩一のサーブだ。バックハンドから分かりやすいモーションで長い下回転をフォア側に打つ。

すぐさま強烈なドライブが返ってくる。あんなに長くて分かりやすいサーブを出せば打たれるのは当たり前だ。もちろん、浩一はワザと打たせたんだけど。

浩一は台から二、三メートルほど離れた場所でドライブをフォアで待っていた。タイミングを合わせて綺麗な弧を描くスイングでボールを切り下ろす。ボールには凄まじい下回転がかかり、浮き上がるような軌道で先生のコートに入る。これがカット。ボールを切り下ろし、下回転を与える守備的技術。カットマンっていうのは後ろでひたすらカットで守ってチャンスボールが来たら叩く。そういう戦法を使う人のことを言う。人によって攻撃と守備の割合は違うけど。

体力的にも精神的にもかなり疲れる戦法だ。

先生はそのカットをバックで押すようにして返す。ボールはやや短めにバウンドして少し加速した。そういえば粒高だったな。

台の近くに落ちる短いボール。浩一は素早く前に動き、ボールを打ち上げてまた後ろに下がる。台に近すぎてカットが出来なかったらしい。

落ちてくるボールのタイミングを計って先生がスマッシュを打つ。叩きつけられたボールは大きく弾み、やまなりの軌道で飛んでいく。浩一はそのボールの横つ面を思いっきり叩いた。前でスマッシュをカウンターするのは難しいけど、後ろに下がっていればボールは遅くなるから返しやすい。

先生はそのスマッシュをバックで弾くようにして返す。ボールは低くバウンドして浩一の足元に飛ぶ。

浩一はそれを拾い上げるようにしてカット。相変わらずボールを拾うのは上手いな。

先生はそれを粒高で押す。浩一はカット。この流れでラリーは続いていた。もうボールは十往復以上している。

浩一のカット。カッン、という音がなり先生のコートにボールが返る。

先生はそれを粒高で押して——浮いた？

ボールは力無くバウンドする。

浩一は素早く台に詰め寄ってそのボールを叩きつけた。ペチンと先生の手首にボールが当たる。これでようやくラリーが終わった。

浩一、ナックルカットか。ナックルカット——あえて回転を掛けずに返すカット。相手は普通のカットを返すためにラケットを上に向けているため気がつかないと回転の誤差でボールが浮く。でも回転が掛かってないから相手に気づかれればスマッシュなどで攻撃されて逆に不利になることもある。いかにして普通のカットに見せるかがポイントだな。

「ドンマイドンマイ」

先生はニコニコと笑いながら自分を励ます。

もう一度浩一のサーブ。さっきと同じ動きから今度はバック前にサーブを出す。

先生はそれを粒高で思いつきり押す。

ボールは正面に飛び、深い所にバウンドして浩一に当たった。お、プッシュだ。プッシュってというのは名前の通り、ボールを押すようにして打つ技術だ。単純で短い時間で使える割には威力があつて得点に繋がりやすい。特に粒高でのプッシュは打った本人も回転が分からない時があつて強力だな。

浩一は下手にバックを狙えなくなったな。まあ、浩一ならそう簡単に負けないだろうし、大丈夫だろ。……多分。

「あゝ、ドンマイ」

浩一はそう自分を励ましながら先生にボールを投げ渡した。

先生は台につき、自然な動作でボールをトスする。フォア前に短い下回転サーブ。

浩一はツッツキのフォームでラケットをボールの下まで入れた。そこからラケットをかぶせるようにスナップを利かせて振り抜く。

良い攻撃だな。

だけどその攻撃も簡単に返されてしまう。浩一も曲がるカットでコーナーを狙ったり、ナックルカットでミスを誘ったりと色々やっているけど全然通用しない。

少し甘いコースにいくとドライブやプッシュで攻撃され、良いコースを突いたとしても粒高を使って軽く返されている。しかも左右に振り回されて疲れてきている。

先生強すぎだろ。

「ラッキー。もう一本」

先生の声が響く。左右に振られすぎた浩一がバランスを崩してしまい、ボール拾えなかったからだ。

結局、浩一はその後ほとんど点を取れず、11対5で試合は終わった。

「ありがとうございます」

浩一は先生に頭を下げた。

「あゝ、浩一君だっけ？ 強いね。確か中学校の時は県でベスト64だっけ？」

「え？ …… いや、県でベスト4ですよ。ベスト64は中学校で最初の大会で取りましたね」

浩一は驚いた表情を見せつつも答えた。

……なんでそのことを知ってるんだ。一番良い成績は知ってることはあるかもしれない。けどベスト64っていうのはおかしい。一番悪かった時の成績でもない。他の情報に埋もれちゃうような記録なのに。

「先生。何で俺のことを知ってるんですか？」

浩一が訊く。当然の疑問だ。俺も知りたいから立ち上がって二人に近づく。

「ああ、その時の大会見たのよ。たまたまね。それに私、沢波中のOGだからその時の沢波中メンバーの成績は全員覚えてるよ」

そうか、だから俺の出身校を訊いたのか。そのときは俺も卓球部

だったからな。それで勧誘したのか。

「そうなんですか」

「そうなのよ。あ、一条君も試合する？」

近くに來た俺に気づいたのか、先生が俺に微笑んだ。

「いや、ちよつと疲れちゃったんで勘弁してもらって良いですか？」

「そう？　じゃあ、今度試合しようね」

「そうですね」

適当に頷いておく。ちなみに疲れたのは本当だ。久しぶりだから疲れた。疲れたから試合を断ったわけじゃないけど。

「全員集合ー」

鷹野先輩が召集をかける。俺達は駆け足で鷹野先輩の周りに集まった。今度は試合形式で練習するらしい。新入部員でまだ大した練習をしてない俺は見学。下手すぎて練習にならないからな。

とりあえず早川先生の試合でも見とこ。相手は——山本か。11対0。

……もう試合終わってるし。まあ、浩一でも勝てないんだからしょうがないか。

早川先生か。只者じゃないね。

これから面白くなりそうだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0085e/>

三メートルの戦場

2010年10月9日07時38分発行